



長崎大学医学部創立150周年記念ロゴマーク

医学部のロゴマークにはシーボルトノキが用いられている。牧野富太郎は鳴滝塾にあったクロウモドキ属の新種に *Rhamnus sieboldii* Makino と命名した。後年中国の *Rhamnus utilis* Decne と同種である事が判明した。シーボルトが中国から取り寄せたのであろう。鳴滝の原木は枯れ、その一部が医学分館にある。この木は教育学部の庭で見ることができる。

医学は
長崎から

連載
Vol.2

《出島の博物学者とその医学》

長崎大学大学院
医歯薬学総合研究科

相川 忠臣 教授

Aikawa Tadamichi

出島にはシーボルトがケンペルとツウンベリーの顕彰の為に建立した石碑がある。碑には、ケンペル、ツウンベリーよ、みてください。あなた方の植物がここに毎年緑きそい、咲きいでて、植えた主を忍んで愛らしい花のかづらをなしつつあるのを」とある。出島にはこの3人のような優れた博物学者が赴任し、日本の動植物や風俗を調査して世界に紹介する一方、最新の科学知識を日本に伝えた。医学部のシーボルトレリーフの支柱にもこの銘文が刻まれている①。

日本植物学の父 ツウンベリー

ツウンベリー Carl Peter Thunberg (1743~1828) はスウェーデンに生まれ、ウプサラ大学で近代植物学の祖リンネに学んだ。リンネは植物を雄しべの数と雌しべの花柱の数で綱と目に分類した。自然の秩序の素晴らしさを性の体系により明解に示したので、多くの人々が驚嘆した。リンネは弟子達を世界の植物を分類する為に派遣した。ツウンベリーもその一人である②。1771年ツウンベリーはアムステルダム大学ヒュルマン教授の元に遊学し、教授の持つ喜望峰の珍しい標本群に心を惹かれた。教授は日本の植物学調査のための資金を調達してくれた。まず東

インド会社の医師となり、喜望峰でオランダ語を身につけることにした。北を山脈で遮られた喜望峰は、独立した生物界を形成していた。3年をかけて未知の喜望峰界をくまなく探検し、多くの動植物の標本を採取して、後年『喜望峰植物誌』を完成させた。

1775年ツウンベリーはジャワのバタヴィアを経て長崎に向かった。しかし出島に隔離されると植物は採取できない。彼は出島に運び込まれる牛豚の飼料に目をつけ、植物や昆虫を採取した。日本の植物で治療薬となるものを教え、医学を



② ツウンベリー肖像
肖像を取り巻く植物は、ツウンベリーが喜望峰で採取した標本 *Tunbergia capensis* である。さらに *Tunbergia javanica* もある。彼の師リンネは、属名をツウンベリーに献じた。Resa uti Europa, Africa, Asia(ツウンベリー著、長崎大学附属図書館経済学部分館蔵)より。



③ 『Flora Japonica』日本植物誌
(ツウンベリー著、長崎大学附属図書館医学分館蔵)

伝授して認められ、ついに島を出て薬草を採取する事を許された。1776年江戸参府の折には箱根で採取にいそしみ江戸で解体新書に関わった桂川南周や中川淳庵と会い、本草学の書を譲り受けた。後年彼は『日本植物誌』を著した「③」。シーボルトはこの書を伊藤圭介に与え、圭介はこの書を基に『泰西本草名疏』を著してリンネの植物の分類を紹介した。梅毒に昇天(塩化第二水銀)を使用する方法を通詞の吉雄耕牛に教えた。その劇的な治療効果により、長崎で多くの患者がその治療を受けるようになった。1776年島を離れ、1779年母校のウプサラ大学に戻った。既に大リンネは逝去して、その息子小リンネが植物学教授であつた。後その跡を継ぎ教授となり、学長も務めた。

フォン・シーボルトの 医学と博物学

シーボルト Philipp Franz B. von Siebold (1796~1866)はドイツのユルツブルグに生まれ、ユルツブルグ大学に学んだ。亡父の友人デリンジャー教授の元に寄寓し解剖学や博物学の薫陶を受け、1820年優秀な成績で大学を卒業した。1823年27歳のシーボルトは広範な日本研究の使命を帯びて新商館長と共に島に赴任した。商館長フロムホフは帰国する前に蘭方医たちをシーボルト

に引き合わせた。彼は美馬順三、湊長安、岡研介、吉雄幸載らがオランダ語とオランダ医学に熟達しているのに驚いた。彼の研究を育む肥沃な土壌が長崎にあつたのである。彼はドイツの教授の手法で弟子達に種々のリサーチのテーマを与えオランダ語で論文を書かせただけでなく、学術書を蘭訳させ、資料を収集させて、帰国後それらを集成し『日本』、『日本植物誌』、『日本動物誌』の三つの大著を完成させた。

シーボルトが蒐集した日本の植物はパタヴィアとオランダの植物園で馴化され、ヨトウバの園芸用の植物として定着していった。彼は伊藤圭介にツンベリーの書を、宇田川榕庵にスプレゲルの『植物学入門』を与えた。彼らはこれらを基に近代植物学を紹介する書を著して本草学から脱皮した日本の植物学が始まった。日本の植物の学名を調べるとツンベリーとシーボルトによる命名が多いのに驚かされる。シーボルトは「キヤナギの種名に *Spiraea thunbergii* Sieb. と尊敬するツンベリーの名を献じている。日本名を種名とした植物としてサザンカ *Cammellia sasanqua* Thunb. ④、イヌメ *Prunus mume* Sieb. et Zucc. がある。



〔⑥〕ガクアジサイ *Hydrangea azisai* Sieb. 現在の学名は *Hydrangea macrophylla* Ser.f. *normalis*



〔⑤〕アジサイ *Hydrangea otaksa* Sieb. et Zucc. 現在の学名は *Hydrangea macrophylla* Ser.f. *macrophylla*



〔④〕サザンカ *Cammellia sasanqua* Thunb. *Flora Japonica* 『日本植物誌』(シーボルトとツツカリーニ共著、長崎大学附属図書館医学分館蔵)より

またシーボルトは愛するお滝さんに捧げて美しいアジサイを *Hydrangea otaksa* と命名⑤。地味な力クアジサイを *Hydrangea azisai* と命名した⑥。アジサイは長崎では今もオタキサン花と呼ばれ市花として親しまれている。しかしアジサイの現在の学名にはお滝さんの名は無い。



〔⑦〕鵜滝塾舎之図
長崎の画家成瀬石によって描かれた水彩画。
(長崎大学附属図書館経済学部分館蔵)

シーボルトは通詞の吉雄宅と榎林宅を訪問して講義し治療した。白内障手術は日本では水晶体を墜下していたが、彼は散瞳薬を用い水晶体を摘出した。土生玄碩は瞳孔が開いて盲目となった患者に針で穴を開けていたが、彼は光学的に虹彩を切除した。彼の名声が高まり門下生が増え、鳴滝の別荘に住わせるようになった。美馬順三、岡研介や高良斎が指導し、シーボルトが講義に訪れる鳴滝塾には全国から多くの俊秀が集まった⑦。1828年江戸で天文方高橋景保が国禁の日本地図を彼に渡した罪で逮捕され、世に有名なシーボルト事件が起こった。弟子や友人が刑に処せられ、シーボルトは1829年末国外に追放された。その後19年間も出島の商館医は不在となり、日本は急激に進歩した西洋科学の受入の窓口を失った。